東京ジャーミイ金曜日のホタバ
2006年9月29日

礼拝

親愛なるムスリムの皆様。アッラーにおいて、人間の最たる任務は、アッラーの存在と唯一性、そして預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）が預言者であることを信じることです。信じることに続く重要な任務が礼拝です。イスラームの五行のうちの２番目を構成する礼拝は、聖遷の１年半前、ミラージュ（預言者の昇天）の日に、義務とされました。

クルアーンは、「あなたに啓示された啓典を読誦し、礼拝の務めを守れ。本当に礼拝は、（人を）醜行と悪事から遠ざける。」（蜘蛛章第４５節）という表現で、その最も重要な機能が悪事から遠ざけることであることを示しています。アッラーは私達に、礼拝に重きを置くことを特に命じておられるのです。雌牛章では次のように述べられています。「各礼拝を、特に中間の礼拝を謹厳に守れ、敬虔にアッラーの御前に立て。」（雌牛章第２３８節）

親愛なるムスリムの皆様。様々な困難さで満たされたこの生の苦しみに耐えることは、ただ礼拝を荘厳に守る人達にのみ可能となります。「忍耐と礼拝によって、（アッラーの）御助けを請い願いなさい。だがそれは、（主を畏れる）謙虚な者でなければ本当に難かしいこと。」（雌牛章第４５節）とアッラーはおっしゃっておられるのです。言い換えれば、この世の様々な都合は、アッラーへの愛を何よりも優先させる信者にとって、礼拝を放棄する言い訳にはなり得ないのです。

預言者ムハンマドは、何かを悲しまれた時、そしてムスリムに災いが振りかかってきた時、礼拝をされ、次のように言われていました。「ビラールよ、起き上がりなさい。礼拝で私達を楽にしなさい。」また「私の幸福は礼拝にある。」ともおっしゃられ、礼拝が幸福ややすらぎの源であることを示されたのです。別のハディースでは、預言者ムハンマドは、礼拝の益を次のように説明しておられます。「あなた方のうち、誰かの家の前に小川があり、そこで日に５回清めれば、その体には汚れは残るだろうか。」話を聞いた者達は「全く残らないでしょう、アッラーの使徒よ。」と答えました。預言者ムハンマドは、「そう、日に５回の礼拝もこれに似ている。アッラーは礼拝によって人を罪から清める。」と答えられました、

あらゆる機会を通してウンマに礼拝を勧めた預言者ムハンマドは、この世界から去ろうとしておられた時、そして死をもたらした病の床で最後の時を過ごしておられた時にすら、最後の勧めとして次のようにおっしゃられたのです。「礼拝に重きを置きなさい。決して放棄してはいけない。」また預言者ムハンマドは、「最後の審判の日、最初に問われるのは礼拝である。もしそれがしっかりと行なわれていれば、その他の行為も確かなものとされる。もしそれがきちんとなされていなければ、他の行為もきちんとしていないものとされる。」とおっしゃられ、礼拝が不十分である信者は、他の行為も不十分となる事を明らかにされています。

親愛なるムスリムの皆様。私達の目の輝きである礼拝は、とても有益なものであると同時に、私達に無限の恵みを下さったアッラーに日に５回の礼拝をささげることは当然のことではないでしょうか。私達は病気になると誰に健康を求めるでしょうか。借金があると誰にドゥアーするでしょうか。困難に直面すると誰の扉を叩くでしょうか。

今日のフトバを、近代史の中でよく知られている、カフカスの司令官の一人シャイフ・シャミルの、礼拝に対する姿勢を占めす話を紹介して、締めくくりたいと思います。暗殺計画によって負傷したシャイフは、２５日間死の床にありました。意識を取り戻して最初にその母に語ったのは、次のことばでした。「私は礼拝を怠ってしまったでしょうか。」